

## 9) ギョリュウ＝御柳

ギョリュウはギョリュウ科の落葉小高木で、原産地は中国である。幹は直立して高さは5～8mに及び、多くの細い枝がある。葉はあたかも針葉樹のように先がとがり、冬には黄変して落葉する。日本では春秋の2回、**総状花序**を出して淡桃色の小さな5弁花を多数つける。春、古い枝に咲いた花は結実しないが、秋に咲く花は結実する。和名の由来は中国名の『御柳』をそのまま借用したものである。学名は『*Tamarix chinensis*』で、属名はこの植物の最初の発見地であるピレネー国境に近いタマリスク河に因んだものだという。シルクロードの古代都市、楼蘭にもギョリュウの群落があったと見えて、小河墓(ショウカボ)遺跡には今もギョリュウの木が茂っているという。

楼蘭は敦煌の西に位置するシルクロード上の都市で、タクラマカン砂漠の東、タリム盆地の中心にある東西の交易で栄えた都市国家である。NHKの番組で何度も紹介されているのでご存知の方も多いただろう。特に2004年2月に発見された紀元前19世紀ごろの美しい金髪女性のミイラは推定年齢40歳ぐらいとされ、視線を釘付けにされたものである。常に大国、漢と匈奴との狭間で、存続の危機にさらされ、双方に人質を送ったこともしばしばだった。紀元前100年頃に漢の武帝は、將軍李広利(リコウリ＝妹に武帝の寵妃李夫人が、兄には武帝の寵臣李延年在る＝**03-01-04**ネムの項参照)指揮の下、2度にわたって楼蘭に大軍を派遣した。この漢の大遠征の際、楼蘭王は捕えられて武帝の詰問を受けることとなり、武帝は楼蘭が匈奴にも人質を送り服属している事を責めると、楼蘭王はこれに答えて「小国は大国の間にあり、両属せずんば、安んずることなからん」と応じて、両属を認めないならば漢の領土に土地を与え移住させて欲しい旨を伝えたという。武帝はこれを聞いて納得し、楼蘭王は帰国を許されたという。しかしその後も度々匈奴や漢の軍門に降り、その支配のもと税の取立てと、民族間の葛藤に苦しんだ。この金髪の美女は、それよりもさらに1800年も前に生きた女性で、この時代がどんなに安らかで平和な時代だったかを静かに語っているようにも見える。

イギリスでは『Chinese tamarisk』と呼ばれ、中国では前述の御柳の他『雨師柳』『檉柳』『河柳』『三春柳』などとも呼ぶが、三春とは中国では年に3回花が咲くためである。日本ではギョリュウを主に庭木として植えたり、時には盆栽などにもしている。

中国では古くから薬用とされ、利尿、解毒剤としても利用されていた。『旧約聖書』の「出エジプト記」のなかで、イスラエル人が神から与えられた『マナ』という食物は、同属の近縁種『マナギョリュウ』に寄生する『マナムシ』の分泌する液体から作った糖蜜状の食物のことといわれている。『檉柳』という名称もこうした故事と、どこかでつながっているのかも知れない。またヨーロッパでは脾臓の薬や神経性の不眠症などに効くとされている。日本にギョリュウが伝来したのは江戸中期の寛保年間(1741～1744年)のことで、当初はやはり薬として輸入されたらしい。





ギョリュウは針葉樹のような葉を持つ落葉樹である。同様に花も一風変わっている。





短いタデのような花穂をいくつも出して、房状になる(上下写真とも文京区小石川植物園)。



ギョリュウは日本では比較的珍しい木である。満開の季節に会えたことは幸運だった。





原産地は中国の内陸部で、秋には黄葉し、あたり一面を黄色く染めて落葉する。[目次に戻る](#)